
いっちゃんと私。

一羽涙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつちゃんと私。

【Nコード】

N6660N

【作者名】

一羽涙

【あらすじ】

高校1年生になったばかりの梓といっちゃんは、16年来の幼なじみ。

これは最近彼氏彼女の関係となったそんな2人の、
ういうい物語である。（たぶん）

サイトにUPしていたものを加筆・修正しています。

夏祭り 01

「あつわた飴」

あつという間に夏休みも8月に入ったところで、夏祭りのお知らせがあった。

8月5日ここ、神宮寺神社で花火大会を催すという内容だ。

もちろん、神社で花火を打ち上げるんじゃないかと、その裏手に位置する空き地で打ち上げるんだけど。

“夏休みなんか、あつという間に終わっちゃうんだよ”という私のセリフに、

人混みが苦手なittyちゃんはやつとのことでおれてくれて、私は今、そのittyちゃんと神宮寺神社のお祭りに来ていた。

「おじさん、1つね。」

私の言葉に反応するittyちゃんの行動に、ありがとうと言ってわた飴を受け取る。

ittyちゃんを見上げると、16年間見慣れ続けた彼の微笑みがそこにあった。

私がittyちゃんと付き合うようになったのは、3週間前のこと。

生まれた時からお隣さんの、所謂幼馴染^{いわゆる}の関係である私たち。

迷惑ばかりかけて、私の気持ちだけで彼のことを振り回してきた16年に、

私の性格なんて散々知られてて。

それでも家族のように私を丸ごと受け入れてくれるいつちゃんの微笑みに、

いつちゃんが私のことを煩わしいと思ってくれていないだけ、

私の我侭^{こと}を相手にしてくれるだけで、それだけでいいやと諦めてた。それなのに、そんな私を見透かすように告白してくれたのはいつちゃんだった。

だけど、散々迷惑かけられてきた相手を好きになるなんて、ありえないじゃない。

私の我侭^{せい}の所為^{せい}で友だちよりも私を優先させるようなことをして、いつちゃんを振り回してきた相手のことを好きになっってくれるなんて。

夢かもしれないと思いながら確認することもできない日々を過ごしている時に、

花火大会のチラシを見たのだ。

昔から人混みが苦手だったいつちゃんのことだから半分ダメもとで聞いてみたのに、

返ってきた応えはいいよの返事。

……また我侭言っちゃってるな、私……。

「梓？」

いっちゃんが私を呼ぶ声に、はっと我に返る。
気づけばいつの間にかわた飴屋さんをだいぶ通り過ぎ、神社の半ば
辺りまで来ていた。

急に黙り込み自分の考え事に没頭していた私を怪訝に思っただろ
う、
いっちゃんが心配そうな顔色でこちらを覗きこんでいた。

「なんでもない。」

きちんと笑えただろうか、と思いながら払拭するべく話題を変える。

「ねえいっちゃん、あっちで金魚掬いやってるよ。」

行こうよ、と続けながらいっちゃんの腕を引っ張り、金魚掬いの出
店まで行く。

2、3人の先客がキャツキャと騒ぎながら
金魚を掬っている姿を見て、微笑ましくなる。

「おじさん、私も1つ。」

1 回分のお金を渡して網をもらう。

お祭りに来るなんて子どもの頃以来で、必然的に金魚掬いも久しぶ
りの挑戦になる。

左手にお碗を持って狙いを定めると、慎重にそつとその子の後を追
った。

頃合いを見計らって静かに網を見ずにつける。

けれど、水につけながら追っているうちに、網の端っこが破れてし
まった。

うーむ…敵はなかなか手ごわい。

大丈夫、まだ完全に破れたわけじゃないともう1度体勢を整えると、再度静かに網を水につけた。

——パシャン…っ

結果はあとちょっと、というところで金魚が掬われまいと身体を跳ね、

赤いその子は水の中へ舞い戻って行った。

飛び跳ねた反動で完全に破れてしまった網を見ながら、私はちえつと溜息を吐く。

「おじさん、オレも1回。」

ふわつとやさしい風が起ったと思ったら、私のすぐ隣でいつちゃんがしゃがみ込んだ。

間近で感じるいつちゃんのおいに、私の心臓はドキドキしすぎて死にそうだ。

こんな不意打ちは心臓に悪いったらありやしない。

——そんな風に悪態をついていたら、私のすぐ近くでポシャン…という音がした。

視線をちらつと移すと、いつちゃんの左手にあるお椀に静かに納まっている金魚が映る。

……え、ちよつと簡単に取れすぎやしませんか。

なんなんだこの差は一体、と考えながらいつちゃんに恨めしい視線をぶつける。

「ん。」

ぶつけていたのも一瞬、いつちゃんがお椀を私に差し出して。

「欲しかったんだろう？——ほら、」

「——…ありがとう。」

突然の贈り物に、じんわりと顔に熱が溜まる。
なんだかそれが、泣きそうに嬉しかった。

いっちゃんこと品川一樹しながわかずきとは、小・中・高で一緒の学校、

中学にあがってから高1の今まではずっと同じクラスだった。

小学校の頃までは私とそんなに背も変わらなかったいっちゃんは、中学に入るや否や、めきめきとその身長を伸ばしていった。

男の子の成長なんて私にはわからないことだから、

きつと何かやってるんだろうと思って聞いても、彼は「べつに」と答えるだけ。

身長が伸びたせいでどんどん格好よくなっていく彼に、私は気が気じゃなかった。

——けれど、焦っても、何かできるわけじゃない。

振られれば幼馴染でさえいてくれなくなるだろうことを考えると、とてもじゃないけど告白なんてできるわけない。

だから、私は、自分の気持ちガバレないように、一生懸命に鎧を被るのだ。

「幼馴染って言うても、本当のとこどうなのよ？」

新しく友だちになった子からいつも言われるセリフ。

「やだな、本当にただの幼馴染なんだってば。」

“みんなも知ってるでしょう？”と周りにいた同じ中学の子に同意を求めれば、

期待通りの答えをくれる。

「そうそう、この2人にあつまい空気なんて微塵も感じられないんだから。」

まったく、梓も子どもよねーと要らぬ一言まで付け加えていく。けれど、その言葉に納得したらしい目の前の友人は、ほっと安堵の溜息を吐いた。

「なーんだ、よかったあ。」

明らかに、いつちゃんに興味を持っていることを知らせるそれに、私は上辺では平静を装いながら、胸が痛くなるのを感じた。

——私は、自分だけじゃなく、友だちまで騙してるんだ。

だけど、本当のこと、言えるわけじゃないじゃない。

家族ぐるみで付き合いのある私たちのことだ。

振られても、お母さんは平気で私にお隣さんへのお使いを頼むだろう。

会いたくなくても、否応なしにそれができない環境にいるのに、そう簡単に、告白なんてできるわけ……。

「オレ、梓のそういうところ、好きだよ。」

夏休みも目前に迫って来た7月のある日、お隣さん家の縁側でいつちゃんと背中合わせになって雑誌を読んでいた私は、突然言われたその一言に頭が真っ白になった。

「——え……？」

ええと……、なんでこういう話になったんだっけ…。

たしか、「高校に入っても、やっぱりいつちゃんはモテモテだね。」
って

言っただけだったはずじゃ…。

あれ？どこからそんな話になっちゃったの？

「い…、いつちゃん……？」

「ん？」

「今のって、そういう流れだっけ…？」

「うん。」

「……えー…、」

いつちゃんから好きだと言われて嬉しくないわけがない。

けれど、こんな流れでそんなこと言われたって、

どこにそんな要素があっただんだと疑問符だらけだ。

あれ？

いつちゃんの好きと私の好きって、根本的に何かが違うのかな…。

私、どう受け止めたらいいいんだろう…。

「信じてないだろう？」

核心をつかれてドキリとする。

「い…っいつちゃん…？」

恐る恐る後ろへ振り返ってみると、そこにはやさしい笑みをのせた
いつちゃんがいた。

これって…、信じていいってことなんだろうか…。

そんな微妙な感じで、私たちは彼氏彼女になったのである。たぶん。

彼氏彼女になったところで、私たちの間が変わることはなかった。変に意識してしまうとどう接していいかわからなくなるから、努めていつもと同じように振る舞う。

実際、付き合ってるんだかわからない始まりでもあったし、いつもと違う態度をとって、「おまえ、何してんの?」なんて言われることも避けたかった。

(そうならもう、二度と顔向けできないよ。)

向こうも幼馴染だった頃と変わらない態度だし、それでいいんだと思ってた。

——私の中で、くすぶる想いには蓋をして。

「——梓。」

本日2度目のその声に、私はまたやつちやったと心の中で溜息を吐く。

「なに?」

なんでもない振りをしてみるけれど、眉間にしわを寄せて何か言いたそうにするいつちゃんの様子は変わらない。

「——あつ！いつちゃん、向こうで射的やってるよ！」

この空気をなんとかしたくて言ってみたことだけど、苦しかったかな…。

いつちゃんが溜息を吐く。

それにびくつとなりそうな心を押さえて、いつちゃんをそろりと見てみると、

“バカだなあ、おまえ。” って言ってくる時と同じ顔をして、こつちを見ていた。

「——…いいよ。何が欲しい？」

そう言いながら、いつちゃんは射的の方へ足を動かし出した。

私の苦しい誤魔化しに乗ってくれたいつちゃんに、
なんだかすべてを見透かされているような気になる。

——…空回りしてるのは、私ばかりなのかな……。

少しだけ寂しいと思うのは、やっぱり私の我が侘なんだろうか…。

「——…ほら。」

ふにゃっと、やわらかい感触が私の頭を打つ。

え？と思って見てみると、くまのぬいぐるみを持ったいつちゃんがそこにいた。

いつの間に射的の出店まで来ていたのだろう。

「いない？」

そう聞いてくるいつちゃんの考えていることが読めない。
呆れてる…よね。

せつかくいつちゃんが無理してまで来てくれたお祭りで、
一緒に来てる私が上の空なんだもん…。

「——梓はさ…、楽しくなかった…？」

“オレとここにること。”と続けたいつちゃんの瞳が揺れる。
私はそれに、答えることができない。

——…だって。

全部、私の我が侘なんだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6660n/>

いっちゃんと私。

2011年5月18日13時37分発行